

思春期は女の子だけのもの？

熊本 悦明

性の健康医学財団 会頭

先日、厚生労働省による21世紀の新時代に向けてのプロジェクト“健やか親子21”の会合に出席して驚いた。思春期の子供達の健全な成長を育むことを目的としたその委員会の、並み居る多くのメンバーの中に、男の子・男性のことを真面目に考え対応している専門分野の代表委員が殆ど、いや全くいないのには、本当にショックを受けた。

筆者も泌尿器科学・男性学代表としてではなく、性の健康医学財団から性感染症を問題とするという立場で招かれただけのことであった。坂口大臣以下、局長・課長さん方に“思春期の子供の半分は男の子であることを忘れないで下さい。こんな女性偏重型のメンバー構成で社会的に健全な男女思春期問題の教育指導ができるのでしょうか？”とややあきれながら質問した次第である。

確かに、医学の中にも婦人科学があっても男性科学がなかった。男性は人間、女性は特別な人種、だから男性は人間学としての医学だけでカバーすればよいので、“初経から閉経”という特殊な人生コースを持つ女性は、“人間とは別の問題を持っているため、それなりの医学的対応が別に必要なのである”という古典的医学の理解がそのまま社会常識となってしまうていて、こんなことになってしまったのだろう。事実、日本思春期学会も、まさに極度の女性偏重型で、先日のその委員会での自己紹介で思春期学会代表は、構成組織の中の泌尿器科学のみを、わざとだか、忘れたのか、はずしていたのにも全く驚きと不信感を抱かざるを得なかった。

このような事件はなくても、筆者は思春期教育の中における“男

性問題の欠落”についてはかねてから問題視しており、かなり警告的発言を続けているのだが、殆どの方は真剣に耳を傾けてくれない。いな、思春期ばかりではなく、成人期・更年期・熟年期にかけても、“男とは何ぞや、男を心身ともに支え、活性化するには如何にあるべきか”という、医学的アプローチが殆ど真面目に検討されてこなかったし、社会的にも全く取り組まれなかったと言ってよい。

男性は“男としての特別なカラー”を持つという概念はなく、問題のないただの人間、鉄人であるという理解であり、それに対して女性は女のみにある特別な問題を抱えて生きるの、それに注目し、問題視して、医学的にも社会的にも研究もし、支えねばならないという。このような社会的常識を打破せねばならないと考えている。

男は男としての問題を、幼小児期から思春期、青壮年期、更年期、そして熟年期と一生通じて抱えている。女を“女たらしめる医学と社会学”があるように、男を“男たらしめる医学と社会学”があり、それを単なる人間扱いから、しっかりとした男性学として体系化することが必須であることを筆者は強調し続けている。

21世紀に向けての社会は“鉄人”対“女性”ではなく、“男性”対“女性”という立場から男の人間学を考え直していかなければならないと思う。男性学—人間学—女性学の3本の柱を立てて、思春期問題も男女両面から真剣に考え、医学的にも教育学的にも対応していただきたいものである。

再び申し上げたい。“思春期は女性にだけあるのではない”と。